

異なるワクチン同士の接種間隔

接種ワクチン → 次に接種するワクチン



※接種から数日間は、発熱や接種部位の腫脹などの症状が出ることがあります。規定上接種が可能な期間であっても、必ず、発熱や接種部位の腫脹がないことなど、体調に問題がないことを確認してから、接種する必要があります。

※特に医師が認めた場合、同時接種を行うことができます。

※同一のワクチンを複数回接種する場合の接種間隔については添付文書等の規定に従ってください。

ワクチンの分類

注射生ワクチン	経口生ワクチン	不活化ワクチン
<ul style="list-style-type: none"> ●麻しん風しん (MR) ●水痘・帯状疱疹 ●BCG ●おたふくかぜ など 	<ul style="list-style-type: none"> ●ロタウイルス 	<ul style="list-style-type: none"> ●インフルエンザ菌b型 (Hib) ●肺炎球菌 (小児用・成人用) ●B型肝炎 ●DPT-IPV ●DPT ●DT ●ポリオ ●日本脳炎 ●インフルエンザ ●HPV ●破傷風 ●帯状疱疹 ●A型肝炎 ●髄膜炎菌 など



武田薬品工業株式会社

2020年10月1日から、
「注射生ワクチン→注射生ワクチン」を除き

**異なるワクチンを接種する際の、
接種間隔の制限が一部緩和
されます。**



2020年9月30日

までの接種間隔制限

・「生ワクチン接種後27日以上あける」

・「不活化ワクチン接種後6日以上あける」

2020年

10月1日から

・「注射生ワクチン→注射生ワクチンの場合に27日以上あける」
のみになります。その他の場合は間隔に関する規定はありません。

ワクチンの接種間隔が改定された理由

1

不活化ワクチンは投与された抗原の増殖は起こらないので、特殊な例を除いて他のワクチンによる効果への影響は考えにくい。

2

生ワクチン・不活化ワクチンともに他のワクチンとの接種間隔が安全性に影響したという報告はみられていない。

3

ただし生ワクチンは体内でウイルスが増殖することで効果を発揮するために、他の生ワクチン接種により産生されたインターフェロン※により増殖が抑えられると、その効果が激減する可能性がある。

※ウイルスに感染した時、体を守るために体内で作られるタンパク質の一種。

